KODAK Color Control Patches ©The Tiffen Company, 2000
Kodak LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

中村俊定文庫
文庫 18
904

俳諧七部集抄聽　八冊

況齋因本保孝稿

大郷西竹
珍藏

春の日の抄聽

完

友人藍亭青藍俳諧七部集の注解ものとて筆をとれて先
春の日一巻書ひたりとてみせる又友人小笹有常の藏に世人
所うたが春の日の解一巻もたるを此度かりて彼と是とをよみくら
べてみたに得失互にあるべしおのれ此道はさたたるたるをのも
なれば に入まべきなれどかるもあるむかとおもふふ〳〵と面合せ
書つりおくこゝは両書に走りたてたておのが機軸にあるすかし

慶応元年丁丑八月　泡齋

小笹氏のもたる解には巻末に文政七年さるみの老人としるしたり小笹云さるみの老人
俳諧有良善院にてしり人也此一巻老人の自筆ゝゝ此老人の物しるしたるものゝ此

老人の男今の良善院にて此次は根山年庵中塚に住む也近日たつねて外の集の注解も有やうしやととひこゝろみんと云て多後小笹氏多のもとに有たる今の良善院は其比しうすと云つたへ

春の日　冬の日にならふ比叡中三昇仙春季の発句なる故之　春めくや　はつ雪　はのこ　雪あしあとに　杜国　こし三昇仙ノ発句之

熟田　尾州愛知郡

涼ふ　熟田の名より勢州桑名へわたる

並松

垂五　名古屋上林材木町かゝ加左衛門之後に宮の澤に開墾して沽左衛門と

いふ　○年一ノ俳句ノ人より

櫻ちる中馬あかく連　弱年のつきやうくと云一説　業掛の端つなをかく引連たる之

山かすむ月一時に鐘ながら　芭句を運座のもて見たて　欲主の鐘　春の日も遠夜にて行

芭て月数にあ鐘を見なたるを一時に鐘をたてつけたりかとくにあもふ之

鐘ながらの大にあたる　敵のやかたの一時にと云たるさまた見こゝろ之也集のもの鐘寒と

中村安定文庫

ものく度にたにあたる之

大不風に　しかときこえぬとよくくきけばかもめとたしかにしられたるとし之

くもりに沖の　風さわがしく沖の山花雲くれはさしくもりたる狀によくくきけばかもめの声と附

たゆた之

須磨　播州矢田郡之茅渟を夏の宮なりにて俗にかきくり浦上おちやかなあにより

夏もあせたまりて須磨寺に行つくさまをいふ之

おのくふくた笛をいたく　須磨寺に敦盛の青葉の笛来れば茅を荒涼して見るさま之

平家物語巻九　敦盛　謡曲　敦盛　(青葉の笛のことは平家物語)

し　茅渟汀となしたにいひうつす

文王の囿　毛詩大雅　靈臺　皇篇による之文王靈臺を造し時の来歴の笛にいひうつす之

雨の雫の角ぐさ　岸の葉に雨の雫の玉をおくとふ角ぐさは玉といふ之又玉の徒化等に

およぶをいふ　又遠　班固の靈臺の詩には田ゆりて百穀ありてあることあり

肌寒を　久方のこゝろく世に無常人も遠に茅渟の中にうつもれしにふ雨の雫の茅渟

にあくといひ　書よ建かに行に人命若朝露の如しあり　秋風にしはしとまらぬ

露の世をたかるの雫の上にあるみん　(かゝるひとせ雫之)

俤城　茅渟城をとふり乱かくすと附之

霧はふ　乱かくすとふふり暁ふに鏡におかれのうつりたるを人のかけのうつりたるを

おもかくものとを

おもふ之　とろかたるさま殊勝之霧といふに暁のさま有て鏡のくもるにもよしあり

わかく　茅渟の鏡と和茅の鏡にひうつす

無尾り　茅渟の興の道所をいふ。

花に長男の　神奈川の旅場のさまにみふしてゝ

柳よりき　雲上の人野外遊覽にしかはひなせたるゝ

入かゝる　遠と春日もくれむとすれは樓はる事に門をいそゝ

うつかりと　燈のいとくにおそはゝ

ふるさとに　家内遠まうたるを女てゝ出發のおりに梓要めはなをして

庭を伝ふくきこ花さまゝ

黒髪と　未だ人のたのわれ未うねて切あるたなりしの出はよせを受たさまゝ一説に

出によせときとうわ那しを大をいよ〳〵われ業て髪をかゝ〳〵お送ゆうし

いとゞかしこし　家内女おひとりたゝ一かね病おうし却に針路をすねく

松の木に　宮司は神職之宮司なれは無医をいかゝうて西洋の針をとゞ（つきまを也　高人）

よろかひて参し休もゝ

はたしの　ようやひたる宮司なれは内家に人物ふしてゝ

朝ほらけ　人物もなしとうやう朝とうけあちらに母をつかす賓来し主婦をゝ

念佛　主婦とゝ不しを花房ふゝ見ゆ

禮拜　松葉のさかりをむかしたゝ今はあはて禮拜をふりたゝ住むを人念仏

ゆゝしてさふけなる体之

梅花を　鄙に咲を梅花とうやうの梅をお木と時代素に書ものの侍に

なりたる梅を左部助梅とゝ人のいしゝ名はあ名年殘りてゝ知おにみえ

あゝ住作とゝ今あすにいひふまゝ　家に部助かかる

傘の内　雨ふたる多不傘のうちにて出家内のちゝ門に近附になりし之

朝熊　朝熊山ハ勢州渡会郡之北山ナリ寺僧ハ八軒の内に近附ヲ[illegible]しさまを

わたぎす　新茶ふかすもこゝにせんそさす富多形村を不二[illegible]西行之とゝまる

山茶は朝熊山ふもとに立る白華あるを西行なれば奇まゝ

釣糸ひろと　ひしなわさをしりて附ちを

世たあはぬ　句を辞して俗外に零度の住居をなし新水を相住のあまをたに[illegible]

さまたけ有り奴己妻をおもはなせるか。

[illegible]　貴人のかなみに茶烟をおはりたまし之

いく春と　茶烟とゝふりうりて花と竹といふ之永まゝは〻く春をわすれた

こゝは表門にて水あて春をすこすをかなみにとゝふ云[illegible]かと問ヒ之

美人心安花竹有和氣　岱詩

山前花井幽　北詩　○〻く春を三月ハ十二月ハ[illegible]ノハズ

[illegible]　花と共に[illegible]しくあをびくすりを之を[illegible]之一家風雅さまを之

○

野水　立一

なる坂　大和名所図会にはく奈良坂、南都の今[illegible]を[illegible]延宝の頃まで[illegible]に八重桜ありしか

八八き桜一株あり[illegible]句の高は奈良坂ばこを畑う山も八重桜永ゞ奉[illegible]の八重

桜はいかゝ[illegible]ることなかく畑れ山に咲せし[illegible]趣向あたしき之

おもしろう　寺院の晩鐘ゆきとゞかるさまを八重の桜に花ゆとけるとゝ古[illegible]

春の旅　高[illegible]春日のたびにて城下にさかゝた行かゝの旅着さりくあり桃の節供之

とおもろくこなるゝとゝ[illegible]風はをもせたる之

口　さ一き　三月三日ちかにて汗水はを之

ころびたる　橋もなき人とて垂石おくほの水に鮓さはしるを百うえを之

花のよう云ハ鮓屋小ゆくさまを書して花の鮓をはいとしなんて

風書き　温泉に逗留のとまり屋て時ハ恒多勢うたひなどし春の夕ハ川辺に

おりたちてあそぶさまを之

のとけしや　茅舎と摂州有馬陽の山を見て鮓屋の人も伊勢人なと云ふ所にて

姫ほたるさまを之　夫木を船は鮓屋に伊勢と惜あひのおとこ山にうきねをす

る　行笑

内侍の　鮓屋を領する業が女伊勢の国を任せられし業が主ふる衣帯や

お供の腰おさたる　祀中にて内侍家が屑の国をえらぶと頭なりたる附之

物ねぶ　茅舎と句為内侍ふる足はみて軍中稽古の誠御座をもたはは

かくりあはすいらにやさしき姫にいの之

名ものうらと　姫君ものの意をなぐさめて眺近の老人ふるが祝言をするさま

附たる之　茅舎軍の中とてあたりて之大関小四名陣の時相州の山中

の花夫　掃苗を寿りしと有るか

大年て　かくりは識著入用の為ふる大年とうる茅舎ふるとふる年ふる

大黒書絵掛にむかひて　合仲すること　笑直なる老人の意きはふる

かくりと中分なるさまを見ふる之

ものこと　夷掛にむかひて合仲にてあるまきたること　義なるうる

ふる為有ふ　隣の人ふる之

朝夕の　隣とてふる中垣ふるに枸杞うゑて朝夕にわかまみんの料に

まことに天の安なるべし

やはた　家内田舎にかりそめの

一夜かす　家内と旅中四条にて彩麦の形ふるまひ見て一歌

やまのたつ　西ふどかひ垂し郭ゆり寺之　麦の形ふるまひ

たつふらん　之千観といふ僧　馬大なりて旅人を書みしの扶桑

陰供千観清水に見えたり　永らをあしてるわ　昭野八秋教千観か馬も

こは魂まつ　千観のやうなる僧有き　和尚の寺に留りて四国をなまんの心願さま之

但三月魂まつるとおもふ未考、報恩経二月五日八日九月十月以上六魂祭

なりと或人云り、言口の説か又一月廿九か、明年に大方供仏報恩経七尾人

あり北墨　一おもふ　はた校閲せず　後明日来物語の七月の条に魂まつるは

一説に

あはたくひ　あはとゝ云ことも之なり。

陽炎の　子ふど気なりてもえ夫婦のかげろふのかく　あるかふきまたもえてうなる

いつて　こなきさきぶの月と魂まつるさまを附之

春雨袖に　家内の死角を国枕の前に見えし清見寺天室大伴家子のこなる

春雨のおたふの長絃ふ供仏をもつて古製をもとめたるを盛衰記に

なりまの山　みしのくまの前のなりば腰赤のみつき洗たるもんとあり

エイ山ルヒ　あはれ覚えずよく寝ぬて　たゞ切おくた国枕たゞて清見寺

国を枕て　よしの国枕と家内を見えたりかを附之

力の節　男報ふ家の様式を諸国に後名所の十郎を住上之

さなをや　我国のふる法師をもあをたなを家内力の節をうけてかこまのを

もとにて御法とするよし之江州三井寺にはべりて大石のさゝなみと題詠とす

高ひく　三井寺より眺望するたかのかすし

見つけたり　十六夜は近十日夜の海たに明もなるゝ海つらをいと高き思ひたちて

雲のあたふど高ひくの山向に有は月つかすかなるを見附たるさまなり之

屏つあに　家内を初迄一生の掛値にあくまに見なすなり之

○

旦暮が田家に

性の女　主人のこゝろをすしきをさちして之

顔にあらる　情者多が移りにて雨降て顔にあたる之

わらべ歌　家内あひきを庵に有者にてわれと意に高身なるし

と旅館わひきをさまをいふ之　岩木は石巻了之　岩州ニテイハキ郡家

ニテ多ク石ナト正ニテ名おもしかゝず

おし〳〵人を　ものゝ迫上にて人を初に男の幼きをは人をあつしくゝる体之

主なる　初業の国と見迄舟中のそましくみるよし也

薩の穂　家の船中にて大なるけしきなど見定むとさしてをるかゝさを模さま

しなかたなる〳〵ものの穂に水をはるよし之

磯きたに　磯きはもあしをみをしてをた施餓鬼の書あつまり作さまに附之

山ちの方ひく　僧の手ちを磯を陸人のさきに有るし　此のはさまどより地方を見ち

けたる之　或人のいふに淡州志賀の浦ふどをあもひての句ふらんとつくり　さもあるべきか

おのゝ地理を知らず淡州ふまも磯四州かくる風景のみも有べき也

雨の日も　海上より見上たる瓶ふの磯ゝ煙りを望れ出せたさまゝ澄州にし
製す志度焼とゝふ陶器所より来は茅屋を或人は澄州老翁と思れ給ひた
らんといはれしゝ
ひたつきうも　瓶わくやうゝとおもしけしもしほたれつゝて立腰になりたるなど
旅のなかばこゝにたぐ一泊するみやこゝの旅情をつけ加へたるゝ　或人いはく
瓶やく焼もゝ市ばは人家近し飯屋あるゝかと一泊にあくゝとゝ
白なる　一飯をもとめて求しれる僧の庵室を訪たるさまゝ新古今　浮き山に住をり
ける家もとたゝ雨れまるけた庵のとを開て人もみしまりけれはゝとゝ
解はかゝ　万葉集なる百舌鳥皇子をふまえ茅屋の僧室坊に庭苔の格など
むすびて百けん分　来しゝに解やかうんとゝ

今方ふけなりそやみぬ　四十九の　月別て白はるくゝ
嵯峨の　嵯峨の旅の宿に桂茶ぶたる茶碗と人ゝ茅屋の茅色のうたは
いうくしきを白菊のあれた大庭も色なくそむゝ
秋の移り　移り物なる人の村に秋の千移り咲みたれたる園にて茅ゝ
名をしらぬゝ
加丁の　和名しゝてあるゝたゝ筆やめてうたた掃のたもきえたれ
うかゝ大をうゝきまたゝ
わかゝの　大をうゝをあつきと見立きゝくゝのわかゝの月にを附たゝ
海の花　わかゝの月とゝ月より曉歌を詠あて旅ゝきまたゝ四ゝ立い山城宇治
那にて　大津の向之茶は過したる所は花といゝ　うゝの

四こ宅りは四合と云ふは發と直して摩擦と云ふ結さたすもしく

春日く　ゆらなる春の柳ちに笠は聲とまてこみ中からぬもしと

永き日の　春の都向かふたことなし　春日の柳りのさまこ

簀の子　遠く春日ようりと簀のけしきとこは家の内の移情をこかへてちぐ

永き日のまたゆうつすこ

紅路が　弘化元年に没する紅路がひさこは　あれ金このもにより　鶯ホトと来とは

風雅にと見へて情賀のよしこ　茶場宮匠一南屋士　泉南に止住す

連歌の　紅路は初休の門にて芳遠門も遠歌門も　歌はりて来る風

旅人遠歌の人宮の三番に書こ　こ花いちかしくあるさまこ　貧なれは物くる

人もなけれはこ

滝壺に　井筒屋に泊る時　高歌たて　遠歌のとき　滝のひきかしかまきて

為和の大将　山より　岩をあ来て　滝の為所にみたきなれは　物者

きこえすして　遠歌しみてなりしを　弁内侍　法に書を侍り

李此　塔本の弁内侍　日記をみた　此歌　映阿のみ　ちり

日記は　塔の本にて　此時　家内の　とふとうけて

今こそ　いこ　此　いちかしく　為和大将の　岩にて　水の音をせきたるなり

世は　野ヤ　ある者こ

岩　苔に

紅州　熊野　天狗が　峯の　絶頂に　生まを　樹　多け　緑に　あの　所　為こ

今滝壺こ　ふたたび　竜に　ちれ　ふたたび　岩を　ふれは　あ　ほたけ　ちの　ぬく

なれば浙童ふたゝび佳を十かへて岩たけものの名葉に見えたる之

むさぼりに故食喰ひ〳〵みくの母世の中に岩たけあることを芽さ枯れもあるなこと之

延二枝も　また知足之近年定と云たに本づきて多の白のむさぼりの語をしること

新田の　たゝち二枝の陰宿の新たくの裏をみんの原にいさか毒相作る之

芽おと　はなで遅留と花なる芽おを知産をてふるてけき遅ちすぎまに云こ遅ての

芽おなれば本と一うりわくと之

風のあき　今あるる芽おを舟をて遅別の老をもみせんそ寒人銘あみ入むと

有を　今年　よと遅之と云い中とにわるしと義人いつり毋よに綱な

と下知したる之

鳥羽のみなと　高州答志郡鳥羽湊ハ山にをひ海にをみて南海第一の湊なり

多の多人を多を今鳥羽の情の強足ねに多うなるものもか風も

多きとき天気なれば魚とんとふるに独じ七之

あらましの　鳴之と多新年の佳りてあるまるの鍋の取をおもひ出なる之おがり

とあるりざこねを知ひよるる之　新川古情　中御堂ちざこねと多ふ中に出る有を

志節ナ陳川も風　桃花庫の新たて　嘉ちき注風之　嬉敷ハ是之　鳥羽

つおりわるりあるまにさ有つ多の注風をもおしもかんをぬとふ言之

つらく　一説はあが姫をを有り知りそしかをたる舞もをしと陽高松り

一説にはあなるをみにかるらひて知りくの智の君といるくをもなく年老

なりとつらく知ひめぐらす多のさまと之いんよけんをへし

わが春の　多の多遅者なれば　あが身ハはるかをを多国にする佳之　一説　一説　一説　神者を

よの中と白花たりて主侍るつゐ[illegible]ず高雅の人と称しいふ之

餅を食つゝ　[illegible]遊　之をなをかきそ　餅をはぶるゝ不　春氏の恩澤多

之と家白をかくらたる所之

山は花　一卯二月の三ヶ月春氏の恩澤に[illegible]ぶ之　春日を[illegible]

五節句　之日の名を日に言ありて春日は一所のものみ多年[illegible]

くらす　山に花をおるあるをうけて春日のけしきをふ

追加

舟泉三

山吹の　此の前れう上花園て山吹の花らんかとあぶくおもふ之

咲水のみに　春川に水のまもそ[illegible]の新つゝ[illegible]春日のけしきを又一段[illegible]也

きさらぎ　氷餅　氷餅を春のたなゝて咲氷をとり二月になりて春の餅

さらぬき　雪の消のうて狩山中をあつもし

狩衣の　宮を住ひのうちる雪ふるをと雪をやしみをそば狩衣ぬる

とゝにの例を為せり西園寺之詩をて後い土為ゝ狩衣之

郭日を　春の郭日狩衣ぬるとおねてをけば春日鷹はをて鷺を[illegible]

[illegible]　春の[illegible]あし角[illegible]

[illegible]　後鳥羽院北条義時を誅伐[illegible]

を為上七[illegible]　[illegible]

月ふき　[illegible]

○

春

長陵の　寛永四年庚辰　肖柏法眼長陵　柏のみんなの百民の書を長し春りしとん

長陵長陵あつまりて今の長陵まで七世と、越後長山迄移にえたり、

一説に、長陵住望打民達家の後のかたにて文和年中の人也とぞ

元日の　門松の内に俗行する物を雑国にあせんとしと事にはおとらしてきまりをけな

元日なれば迄りしとと

初春の　二日の夕ぐれは春の半月のかゝらもなしと

けさの春　麦の穂は菅笠の数にて麦畑の原きを云、春の名けしきみんとなり、

梅は遠の月を送て手はあるとあき麦畑を見ちたすと之千載春のくる

年毎の月を見わたるばかりなる後れ　はるなく似たり

門の松　門の松のうて春あけと苟菊園は春まつ之初霞　世澤集頃用

度解　寛極北面室封寒と百ちるなり之一夜位の別花を苟菊園と云

さし或書に云ふ

鶯の音　地上の梅ちるて鶯の音を求め得たり、白氏梅花歌園鶯迄入新門

と有り或人つり　さまの後白集

舟と　海上にある舟と春りめい移ちり　あまてるの小梅に春ちる之

晴の人気　元日のけ月の人気を知毎のたくさんたる富貴つきまと　故日に今日

霞にひくけとをてと或人つり。

こしてうす　元日は何ち春ふく無のすかたと白氏春巻三七　開眼待　暖林

斜陽日照　腸に春ちて　夜暗窟をつふなりて

〇朝日二句
朝日のさしな
うらゝに吹ても
ふき風に梅のう
こくさまそ

〇家はりの
春日のうかに
なかさ張る節に
うみて年経ふとす
たあはり今の
なかさ香のところに
時のとまりて居るの
張みはそてねた
やうりに香りする
おこなりて香の便に
ふてあれの之

呈はうく　千載山家の頃れた春ゟしあらん　かすかぬきまた首の鳴く之呈に空方

けふこそも　ゟしきを了之ほしはらくはつまを執らやく写すはらくのうり候之　咏けは

昨日は子の日ち事をり等朱紫にきのゝ妻をみるらん之

十七今月は卯の日之

うぐひすは　白楽作一時此家居の人のせうるらん　金陰者をはんそよたれたる所

にくる人をそふりかりてゆわ中をそれは〳〵しらあへたてつく　称も陰者

にくき木は面しろ之

古池や　蕉の梅翁と云書に此句のゆしかくとあるとつり人気なく蛙飛こむ音

のみきこたりし之

山や花　或云雨はやしと云は雨なかしもしたる杉の葉を丸く束ねて出しおくと云　訓蒙図

彙に酒帘さかはやしとつりとけり　又或人云山た花さけは酒売家あ

りたれ出来てこゝの垣こそ垣をも雨笠のしるしあると云ふり　いつであろく

花さそう木て　雲のうきさくらの香にほふ之

〇

春野吟

あし流た　春の野をあくた往来の道の外にありあるをちられ入ることは梅おし

ねてむかへる庵につあることは　或人云雲の陰居秋に此題のはなしありおふし

やうる僧こそ病の癖りしところにつ一句まことる之

うてと寺　寺は山のうてと言たかれても花さく時梅はかれぬもを之

梅木まで　梅を論木なる芽をふく日おもし　木はおとさくたまかひて梅木

まてかれまあらし之

〇

ほとゝきす　时鳥を一聲待あかすは鐘撞子木はさのみるもあらす山鳥の尾の
秋の夜はいかにわれしかんと云时鳥は尾長く山鳥は尾いと長きは
とつふ之
郭公さみのく
かつこゑる
うれしさは　山家のた夢の木にちるを其木の花のみてしたひし人にあふこゝろ
する
菖蒲の
うらかさを

すゝかけやしらかく言の衣川　或人云奥州磐井郡衣ヶ関の事を遊之
武蔵坊弁慶のしるしの松ありてを鈴懸は山伏の法服也それと
山伏ならしは奥州下向の时檜中を欺く便すゝたて扇山の法師
すゝかけは衣川弁慶の时は山伏のはあしかすつかすかけはすゝかさの
読みうんかきを字称らかし　去ては死天之死天山のゆくの衣川
いつれにても不にかのよしの山をもうしのよしの山と云うてもよふく死て
の道に衣川と云か有かこゝくいはんも言なかゝて八雲法抄すゝしき道、檜笠、
名を鈴木は凉しき風ふく衣川と武蔵坊を弟なる百二十三のふる人 △
駒かへて　江州志賀郡に逢坂あり大津と京の間なる逢坂と云所より

口考云或人のよくかせてしけは
ふりくにわろし、すゝのせたる点八
句の庵風の句おもひ合すへし
山伏の衲にて奥州下向したもの
それは右の趣を何とかくへし句を
いふへしとある例　雨ふたもありて
本歌を有て　小てまりをふ
花はすゝかけに咲きるうろの
名在一の花是は春の花なれは
鳥の句の云ふそへき
有る或人歌いて
よくふえうとを
の趣にあかるゝ
にあらす。

西の方にて今の旧地と云所あり 大天の旅行 狩をあて大味まそて
おもしろしと思ひて おくなりて 遠坂をて 狩用ありとこ
夕涼に 夏の日あつき雑炊を喰、万事不如意のあかにて是をたのしと
心をやりて夕涼をみて 納涼する之こと是よく知る人の言こ
第木の樹蔭
ちきこは ふかむる ちきこは ふかむる中にみえすかるを 夏と云たけりといふこ
蓮池の
蓮池の夏蔭 夏木立かげに 蓮を植足せ 蓮をまつ(きたさてる おとさかふ
といふこ

夏川の
夏川の
○
秋
谷の畑
玉まつり 望しき調なもあれは むすしくてしらにもかひて居る之 孝公此桂ハ
人なる生中よりかうもたる桂 人か保氏東お桂おもふ(し
厚きて
雲形 山家集 ふかくに あくる雲のかすこそ月をもてふすかうなりけり
西土を此の部 世設に又ア

山寺に

丸ふく　さやかなる月をそへ又後さまでしきとゝ　芭蕉翁つくるあ中に丸ふく

まゝりてあるこゝ

八島を　讃州坂の浦にあり

吳竹扇　春云はに結にかき白をふたはにかゝ　高実に月之ゆ吳竹は

きこ船中にて月の景をもあてさきて二所度うはあるなり

高殿を　唐秀句方くてみやに新こゝに見れは高きに登りて遠望を待みんと

二三と詠して心待でし

秋ひとり　琴をきて心のうきわれんとするに筆持はなれてたゝるのうるぬしこ

朝かほも　さい時枕のけしき也もとより国花懐素の歌にての句まはあるべ

○

冬

馬はあれ　冬の山は吹きうまを旅人の海のうゝ　野路のむらさきの景色こ

霜さむき　冬家の秋なり

雪のはら　はかふきの大あし(芦)敷の花咲たる雪之敷とそ　枯蓮なり

冬の日をかゝるふゝの雪の枯尾花とゝも雪のうやまきをわかまに

たゝゝこ

馬をさゝ

行燈の

傳士にかゝる宝

冬の日の手聽

完

なにしき

友人青蓋 冬の日の注解をもて来たるを
例の一わたりよみわたして面白きをうきつくる
は青蓋のほと河丸かた鏡の釋とをとる文へたり
乙

乙丑 九月 没齋

本云今大路道三ノ名ヲ難知若狭ト云説甲斐トイフ竹間ト云テ駿河ノ名ヲモヤ有名ノ道三ノ号ニハ今之道者ノコヲ竹前トイヒヤシテン物多クシテ二筆ニアル人名ノアリシニハアルベカラズ 樒友云 藪椿者トハ是従ニ竹ノ外ヲブトニハ竹間者トウヘクシク名ヲウニイルニテ道三ニアカラシ 基子云竹林物語ハ天和三刊行ノ家国物ニテ是ニ

冬の日　此巻中五歌仙追加も悪句多き木はかく多く

狂句の文士　句の発句まは竹斎としられたり

狂句　字あまりの格調比比多し 大鏡なども此三字よりあはれしとて、知らに疑しきは大鏡に句後には此三字除かるといひて多く侍べし 井林物語とふ書の名あり 寛永十三年の著述 其中に山城国りやうくしの井林を興かの 度伝師大ゆりの家賀にて病者さに近つかす諸国めぐりをして 方所に行て駕者の肩板にて休るを乗り此者おりまたみず 句意本庭園にさすらふ事て 病よりもあか水は竹林に似たるを之

山茶花　宋都物の紙に石田主水とて江戸桜武天皇都うつ木 一時恒道也水のみ源なる高歌に山茶花のあるを井林を形て

ゆかりとすることを水あしをあらそ　友人書屋訓蒙の門弟
　　和歌をこの世まとそ　竹庵に

　　竹林か山茶花を折し傍にそりたる附こ

有明の　ちりやとはるる云このみるはしをは林とゝかあるうち也附あるこ

あからま　狭屋に立出る面ナの内全の門口ゝ面つきたつきこ

朝鮮の　野面の花ふるあちらに朝鮮すゝきの生ひ茂りたる牧ゆきにちり

　　あすこ　朝鮮すゝき

日のちり〳〵に　ちりすゝき生る野とゝるより小男て夕の花人も来〳〵稲刈と大意

　　日のちり〳〵は日のきに入ゝとる形こ

秋庵は　来りて居あちらにみそぬ人の来たるを庄ゝたに注ゝとゝるに

　　ゝ居一ちきまちり　蜘蛛　林檎をわちるとゝ

後ちやす　ちりの仕方も後のはちをつるよを　左五中条二除の石つまた

　　たゝうあ吹にちるれてあゝるをてきとたち中間のもちりあたるを

　　をあ一ちこ　望名狩　小野小町の除こり

いつちりの　かゝつまちの穂をちりて後きれ穂子も面はなれ木ち

　　す乳ちりてちるしけれはしほることかねてつちかひちはりとちるこ

　　とあふこ

きゝたぬちば　男にわれ又子ちとしなひたち女のさまたちりなすこ

　　京都堂の文字屋のうちちこ　あに生ゝちから公の娘のちの一つさまこ

新法　巷ちの家に一枚刷て通称ちる女と巷ちの男りてゝ後てゝて

　　ちりすきまこ　新法ハ

あるしい　笑しくて（雅堂と云へる（さ）歌家（焼きむく大たくさま）

田中子　小万桝は大徳に津の国田年ことあり　大和知（白子）後に津の国新收

わかりにある男女多くなれなるなどをおびて人気すぐき歌家に

小万の桝ちこら意と勇ぎることなく小万桝もおなしむなれば　おびひ

よ也ちえ

霧にあれり　田年の小万が桝ちこら霧に船り清川のけしきこ　みなのオスハ

船り人いまきさま彼人。　月渓筆は霧旅　和ナリ

綱手ひく竹の下ちち霧あて舟浮すまふ清の川すし

ちを水を　遠堤十三里を経ゆくそのそゆく黄昏のえきる毎ひかりあり川のけしき

又かけはきき月を接さまたみれうけしきこ　大徳の比勾さし　いくらもまれ勾あり

すき所にはあも有下。　その絵を得あれあり（又い絵ヤ

とあり　ぱあり所にあり　ちち女人の和ちさのあきおを外面に立出ておて

広ちう黄昏の月を接きまたみれるよに附ちり

二の尼に　むつましうしなるまのもたに所あまるをとう云近衛の花のをふど

きこ西行桜の詠に近衛殿の系柄　於系殺　にはく　近衛殿の別也　上之奏

つ面新町の西五辻の北近衛はのたたあり　柄の尼ちとて　あるを二尼いし

大徳に一書ちて一藤二藤の女中尼ちちと二尼ちと尼ちとふ上り　白まつ　二尼と　安心ちて

蝶ゆむくり　尼ちちわ下でむかし変しく　ちい蝶はむくたちまちにさして

あちは尼後のさまき

の子姉に　むかしつかし女君ちたに逢中ちて行ちて、手しかなことをちちちを

て蝶は　むちちとはりたて　手ちちちたるむさまに附ちり

いまをうちみの　ちちれ下でおぼちれ　まさしく敵ちゆひさちあて恨ち

ふくんそこ

ぬす人の　美濃国無坂か細足の杖は中山道赤坂の西にあるそ古杖は今不て宗保手
中一説に杖ちゝを細足の杖宗不れば別る俗を得て今をはあるとこ
無坂説云此杖のことえす

しけし宗祇の　無坂の杖は不又あたらしく宗祇ゆれをけけし水は出来る
ちてよの中は移変りてこ事野州分の宗祇ゆ今伊勢辛りて宗祇
をかりて美の国羽上郡を経りてあり来しこ夫ゆに
白雲あとをとゝよふ　宗祇い白雲とゝ　とゝばこ

ゆきあきて　物すきゆの宗祇の水を見れていたちあが北が角にあることを
風流のもとおいて世理の望あるまてこゝろにあるとこ　風狂人の
神こゝを奉謡に山ずいの北に不　拾遺抄云

時雨は北ゝすれ之
冬ゝ水ゆけて　冬昔は北ゝ冬ゝ水はつゆんをちあしも時雨のふり来
ちゝを冬ゝあ水人とすゝこ

しらくと　ちく人冬昔つ西あかゝこ行ちゝこ

烏帽い　人の昔たはあゝで烏帽の半まて えゝしはらゝ方に用ふゝこ
西土は竜之本邦鹿之まゝを烏帽ゝ笠に用ゝ法あゝや

あけ水さの　源順条ほゝき すきゆて冬ゝは咲けり　ほに四花とゝくみこ
行　後人とほゝきすたちゝて　ゝやりたらんもおゝ水をまゝかれて
ことゝゝふゆの速こゝゝの人あゝてゝりや　ゆの速ゝけじやとゝ　ゝは比長すた
まゝ不来をゝうゝふゆさまに付ゝこ

刈谷侯カ中秋ノ詩鳴誰引取秋水湯入鉢盞敷曉夜鐘聲引

秋水一斗　水土またゝ一斗の水ゆゑく湯つくすたいまた人の手ぬる
周礼巻三十　契壺氏三斗し

日事の平白　石川丈山をきす平日の吹福を寝傷集とふ　ゑの
ゑに詩鈔人本邦に来るもの日本書紀と丈山を愛したること
ゆり出所ゆゑ一斗の水湯を平板丈山のもとを月みちさまぶく
中に木樨　天宝遺事に汝陽自摘紅樓簪豆蔻上とみえたるを大鏡に東と
西書にて汝書の人ゆゑ丈山をもた詩書月をゑつゑ所い
強ずるをふ迷るをたあず
うゑの踊　中に木樨をさむ汝書の人にあすをは飽き牛意したるゆらし
死をを葬りたきまゑ大和物語南院の今君あなきか牛をかして
又後にゆりけれは寿し牛い死にきをいひたりけるかりをに

あゆのしるをうしろ　あもひけ人ゆたかくゑ貴の命を
此面を一寸に寄らかきさまをみせたる也
箕に鈷の上絵方洲の面をは後人を偽たもの絶すへきよりもふき
また鈷鉢をたに生魚を供養をるか　わか牛ふをを等たる布
施にゆるをあたるさまに附たり　字鏡に鈷ヲコノこにとるの
あかいり　色都
家面の面土をき手接紙と神仏にいる結界の表の暖ふた
宝ふをころに人をみとはしくゆるさまこ
けふをいをの　きのふはをきみ接紙と卯社御岡ゆ今日は又ふらゆ
面かをに命くさまこ

後二条

姉の妹の杖より立て来て陽炎と春風を春雨と行保部内
のあちこちは山もかすみ高槻の梢も　近江に初春もなも
れば春風さえ花の風と吹く水ぬるむ頃の春めのまかた

二

廊下　花ふき入る湯殿ふきたる廊下より春の野の花と
白氏　後廊紫藤架

○

おし一ぐ　文選　西京雜記　振衣千仞岡　濯足万里流　と有に本つく四国の志
なれどいまだ年老く自由ならず」　杜律　老大徒悲未振衣

たつ春の　ことしもいまだ世なれつゝ自由と待つ　はつ春の日を
待ちきて　春なつかしきまゝ
霞にまた　北年よりて永は白田をねど風雅の春をして紅顔の枝先に
霞垂るを　春に　みくめて　食之高日　野水之立に　つるかた
住　隠岑を後村の作者之
野菊まで　菊を　ほめて　まて　蝶の羽を　不　今は霜枯に　残る　あこ
枕草子　菊　なくて　花なる　蝶のみなぬかな　時菊の花　めいるふる
上田秋成　雨月物語
うん
うゝふ　ふと　高詩　をきつるを　敢と　字　和　詩　草　又　えり　秋郊ふた
遠　ふる　美人の　ひ　後の　会人　ふと　程　も　詩　なりよふ　ふる　車　を　引くさまと

磐手が月　或日経き比の杜郷名月の宴も出なりて廣かる某が庵か
鈴鼓をならして興を添ふる之　大笹に件の庵の句ありけふよ
云しる附会しなるはわるかるべし
桃花を　或日の庵を見給ふ人近みし見給ひ近隣の庵の頭に庵をもいひし人に桃を
それで一商鎮として此外に割花おほくあり菊葉園　桃園などもあり一二之
こは多桃園にあそびし之
雨ごろ　雨水涙で水も落して浅香の沼のなりしを比桃園の泉水になさせたる
さま之陸奥浅香郡なる浅香沼の面影を写す意なるは始めす
の所業之
奥のききつき　奥州の国司を仰せて都にかへりきて北国へ下りしかく
二月比の余寒のさむしききまで涙流して　此涙に付くと浅香の

沼の面影を土産にお越なりさま之　橘為仲朝臣陸奥守にて下り
みちのくにをかしき所どころ
わたりて　或日奥のききつきん涙ながらに陸奥庵の沼城を見出して悲
奥の詞なかりしく床わけゆくまで詠みし同郷の経家之ときらで詠まま之と
大鏡よりか出でならしかるべく
縁きまなけの　頼まるるにここなるて志つましくなる庵なる仲子は浅香の沼はあはれ
せんと親と記るの契約ありしもさまならん人ありて互にうとくなりしより　わか
身は常命え川なけの身となりて縁さまなけるの名にのこりしを
詠まさま之
口なしと　フスマへは庭に秋萩の花之なり　めとらんともし女に庵ありとまぐる
その有りし縁をのばすかく庵をみつけられては　いとくらきし

くみつかうまつりたんとて　をのがもちたりくこいかにせんと思ひかく
たくひたすらに縁さまたけさせ　人に恨のうしろに向ふ

明日　城中防戦の衍書きて　明日は乗馬をおくえとおもひて　御上の前ちかく
ちきりすると　鉄鍋夜番　てあかりしとこ

小三長　小姓の長に小三郎といふ　はあず　設ていふ名なるて　大将が
こゝにかきりと　西蓮　小姓に　をやりて　大将ちかく　一さし
うたひさまこと　天正十年　秀吉の攻うて　播州三木の城　大将別所
小三郎長治　謀叛に　書をかくり　大将自殺し　残兵の助命
をえひしをもりぬ　大将名小三郎　いさか似ようはししおく

月ハ　牡丹　花寄のまわりにまぶす　牡丹の花ぬすまんとおもふに
月はおそくさし出ると

縄手の　茅の退砂　なる明日　畑にしのび入て　牡丹の花とらんとこ
月弱　共に　乗したもて　主ある花ぬすまんは　いかゞ明わしき
の破損　寄家のさまに　附ちは　言あるとて
こつ〳〵と　茅の中　家に入て　みれは　石に住て　地蔵井を石にきりつけ
と居とこ

初花　うるさひしき　明家　ある所　おもひもかけず　化粧うけしき　嫁の道
さまこ　世の中　かふしき　ゆもあり　まこけしきゆもあり　一般なるぬか
よのさかをかし　もとこいとく　世ちやゝやいなり　二版をヨメコトヨハワロこ

緋川鉄かいつ
ねて君き人にと
ひし比待遠なり
し年をこひしき
出所
末寺とふみて
此附表分明之と
平板もとこそり

みやこくらの　かやうハ小女の通称こ　香句のなめ子に　泌しちがひゆく
をみていまだ　おほくのらしもとらぬをおもふこ

椿はた　椿箱にも餅ふまて　春をむかへたつ　依織の間のさま之　その傍に居
ョ毛にむかひて　春のいへるいくらの　春をむかへたるとふきまこ
オカハ小キ意ニシテ　ひろがぬ間カ　カスカノ意より転して小ノ意ニナルカ

萬おきよ　その間より妍嬌させて　籠の中をのぞく　あどけなき　小女のけしき
こ　秋田よ　萬の秋ふかめて　いきたなき　こゝすごきれ

籬ふかく　香句の妍嬌を転して　寒家毎に一軒旅ねして　よふかに　倒ふれ　申で称に
妍嬌て　夜のけしきを見るさま之　附句
籬ふかく　のこみたるあたりに
高きは屋て　高い妍嬌させて　高おきよと　子風情も有ゝきゝ之

三線からん　香句籬ふかく　あれたるを　不破関に見出之　不破関ハふるくより
あれたるさまに　高をよみ来たり　其懐而之

道すから　関所に逗留する　遍歴の甚打か　旅中よ　打ちる　甚をしろくこゝに
京などは　世人がかなしきあし　いさゝ味深がりて　あそばれん之

ねあくの　年高くなりて　記憶もわろくなりて　打ちる　甚はわすれて
ねあかりにて　年七十ともおとろへり之

奉加　　とも七十余人くなれば收世ものかふさまこ

ひとつの傘　　ひとに会をこふとものを雨にあつさまこ

蓮池に　　路あるゆゑの雨ぬれもなく一つのからかさに

三人こぞりさすこ

まとに雪つかう　蓮池に鳥ふるめあをぶけしきをまとり見ながら写

一ものせんの科りをつかうこ

月にたそこ　　おなじ城するの男子とこんはなもおひとり（きこ女夫と足迄

夕べに城もすき給りて月の下にたてるさまこ　雨板を笠を笠鞘に

ゆくたつこ　春の日にも編を花江の立をより笠鞘を　笠鞘と

云ふ意遣作なく旅中ふた用ふこ

寺ぬきぬた　　きぬたを打女いかもあなくがあり、水はむかし　臨海義云

秋師と問答したる海ふ　　さる風情の女こんふ一たるこ　空年

山鉢とみえたりをを

秋彈の　禅法、大海降　看霜手　答曰空彈　聞声手　ひとりきぬた打て

一人夫かの月をみて　墓ふく空彈の声もきかといへるほの女のさまこ

冬の実　　冬の立英をみて　　冬の実の赤きた淋しさこ

秋すり砧を　　英茶をみて　　砧を懐り面せて水の

なきにいかにせんとおもふ　　赤の茶たるこ

ひとりは　　冬の砧をいたすを　雪水の傍が　遠寄師と附けんい良考一様

つけなるさを言ふ迄　　手家相伝　少たに幸　典侍子

なは内侍 法華となりて建仁門院にかの之定家に後白河法皇あり
ねつみに女院 典侍為子 為家小たる姉 元仕内侍 法皇にまゐり中
三月三の花 三月三の桃花に寄せ つらしき尾長鳥 本邦に移なる鶺鴒と
つかの一つ 典侍の為か内侍 為家 といたしたるさまにはなる之
風俗文選 百鳥譜あり あるものもたてよるもしらぬよしあり
今日鳥はまゐるもみるべ
しらみ毛 富士 駿河一の山 山中三所あり 一白髪明神 為
境内に獨活苅明神 ゝ云神 鎮坐す、いと中もしく神祭あるか
為 獨活苅 ゝ白髪明神 獨活苅しる中なる為白髪
獨活をうゑ給たるよりこの為なる神は獨活苅なるべし

例とかりて三月三日祭礼ありて 獨活を花の人と多くおのくとくさ
つりて白髪の神前に御とこ為為全せこ あり為なれは為
あらそひと神事ゝ之なすこ 洋は大鏡にみえたり 宮高可考

○

杖を打の 大鏡に十問ばかりもゆらやかすたちまち時雨する云
のたし書こ

怖みの霧 霧は春草はく霞ノアヤマリ 霞は和名抄に立久礼と有
霧ヲ小枝キニハ霞トアリ こゝハヤウ心ツキヲ 四ゼルウチ
こほろみり たちまちにし水の雨より又たちまちに月の光のみえくた

みわたり行ぬ水に月のうつる和歌うみる之

遠**黒の栄** 北みりを半春のけしきたみて 和狩の門先に相録り

しな崎野て こをかこ一はかさまこ

小の江門 やこと者人の和狩に絵ぶきまたとりなす 新古今天のこと

おしあけかあ

馬書かく 江門と出て 郊外をみやり給た 馬書橋かもてる扇に江扇と

はけを扇のごとく骨結て 簀の形にけりたるあり 巻をつふなり

茶の隔者 掃除すつり茶の蛍あるの茶の隔者と附てきて此大ぼの きたふき

野辺にあつををしむ也 大ぼは後名 蒲公英とつふ 半夏網目廿七葉こり

らうたけに 清きまもの内にやしなはる 姫の娘をかしつくものなとふきあて

きのふみし野辺の ちんほ〜 此まもの家にうつしうえたる 姫のきばし

にふりんと

燈籠おろす 夏むまあに冥天 暗おしへおの〜 燈籠おろして

高をみすををいはとをとくとうこ

つゆ萩の 露のかるき枝に萩こほ高りや 萩のたをやかなる枝に露をこほ高

高

葛麦き 萩につゆあきたる 庭を信濃坊と見まうたる之 茶の高 江州

しかるきに 萩に名を付し 寺陵の有しをう 葛麦は早く黄花するに茶も黄はまに木は行きはこう

朝月夜 双六おのもみち見がそう こうに来水と まお葛麦も黄花毎

ほと木は七みちには程あるさらばと今経こうを旅たりて他所あくさまと

紅花賞　茅の舎情ふき故　琴情の白を陽んで　夏双子手ヲ細工上手と

足辺女細工ものおくらんとて　あさくの用の紅花と賞に出さる道

そんほうぐりあく学しと

しのぶまの　しはし君ふあひだの伝計に　敵さくする紅花と賞に出たる道そ

ほうきすきくさまと

命婦の　こまはおこすと　埋田のわかみをみつくこうそ　命婦の君おとす

米おこすと

まかき　まて　津波の見廻に　米ふたるさと

御喰たる　奥の脇より　御像出たりさまと　津波に　あらげ　ふたるさと

振象　振象の津波のなり　悪心の作の　観音堂　像と　鏡の脇より　現出し

たるとあり　或人　いとおもしろ　見えず　又　武州　鮫洲の　観音の

おもしやうと　江戸　絵よりも　ちと　ちがひ　解半

駱駝　此佛を　得たるものを　花見次郎と　見立て　日向国に　家富て　近国

にしられ　ほの　花見　として　花見宗郎と　なぶたりし　宗典　こは　駱駝

駱駝とは　四足　古くと　なるの　こと　徳こより

五形草　花見次郎　此花　さかせたる　畠さ　一ヶ所　もてる　小阪のさまと　みせ　ものと

仏ノ蓮　花茎と　不　開花　五形草　鑑雲英上云

うれしけに　花開なる　事色と

夏畫の　ひばりと　二ヶ　花開ふる　日に　西の　右　ひげ　なさ　まなり。

園芸の中　なかきかなといひしきゆくむかひより　わかなかの西の考二

蹄路のさまを

元禄の　矢部の元禄の名高き梅有りたるか京保年間に焼失したりとぞ

きて旅人のいとゝ想に梅を見まして寄るみしみてやりたりとぶけこ

梅十　元禄の梅に寄よたるゝ我賀に迫り子を捨ておたさすかに

寄るの後茶を飲ひて梅の寄るみて寄るかなは寄るみ城長して

蕭梅と思ふもの知るもの知つるんとこ

晩日と　いつも大年の蕭蕭困序せんまへふくて秘蔵の刀も書抑とこ迫し

むかし養育かねて陰子かはいまは城長しせんへとこ

寒狂　狂い奥の誘さし居天聖向可寄侍笠重寒天寒、蕭香楚地死

刀寄るの寄者の人とあて寄後未一同寄すのぞ　大年に寄中

なれ未木のみに可寄侍とて百寄しとて一見

禅に寄が　江戸新寄ふ三雨が寄侍　寄生十九年寄年花つきて

寄侍絶ちと寄、寄の喫に車て未木に寄に寄侍がとあす

院袖と解て禅寄年し侍る之

あた人と　高雄の客をさす　酒樽と呑ほして　死なば共ともに棺樽に入

と之

芽子の　禅をまなびて　悟りて見れば　人の死も一芽の芽子のはかふく　散ごとし何の

執着かあらん　心あれのものと酒呑して死は寄侍を棺に入へと

ありひさむあたる永を名をこぼつ禅といふこの分別　生涯のさまたり

三ケ月　目に世のはかなきを見、耳には世事をきく鏡の声をきく

秋田かたに　源氏物語　のろしとぶらつか

言ふをやめて　無言とおもひあはれまゝみて釣得し魚をまたはなろう之

声なき　何となく井戸の発るさまを

かけうすき　前髪を近きほとりの花人の枕合仲とおもひよそへて気はわろく

行燈を情しわかる女の言之

おもひかねつゝ　ひとりおもひかねて傍の男の帯引て起すこ

こかれて飛　男の帯引てかきくどくさまに附こ　花の蔭未解　わがおしひい恋し

とおもふよりうかひ出て男のもとに行てかきくどく也

夕望の日を　山高峯　おろしこは夜のもとにてれしあんるあきさらさこの

望月の比　夕月夜のかけとふたり西行と見送之

○

雅俗情に　万葉集土　雅俗人　あしひたくおはすれど　おのが妻ことこ

めづらしき

炭売の　万葉集を翻案したこ

ひとの姿を　人のよそひの為には両肌ぬぎて鏡をぶど　おのがつまの化粧まで

は行とかず　炭売の妻なれば豆さこと高砂ことこ鏡磨両肌ぬく

花森　七十二番職人尽合とみるもしろし

古事記　清女納言　雪落のとき人の清女納言をいたくも褒

たるよしいたさん後学の骨とも成すやとつゝをるまゝ赤い色昌と
は清女紙言をとして、家内の口軽きさまを枕冊なもあるべきう
ゐしひよをくて花蘇の狂歌きまに成之　凡才三は喜を強して
下句のおよぼすを意味とすとか

鶏見る　つゝは狂歌霜中にあるべの呈物也

風吹ぬ　鶏みるまを陰者の家と見立て之

萩おるかゞ　鉄なければ此品を市にやりて酒にかへんとす

賀茂川　胡麻千代参りとゝを今はたえしものなし家内陰者の宅を
洛北と見立てあり近き賀茂川を云たる之　大徳院に参ることあり。

いはくらの　胡麻千代参りやうかゝる所は家みなかゝに来る岩倉むこ

なつかしき時常とゝ　賀茂川と家内にあたる小岩倉なる此
地は納涼にかゝ土地なる色をひきく高もありて家宅と智とひしこ此
事物には名をもとめ国新話の注かきし国国野歌良の物語之とも
内人ゆきけりと友人書草いつる、えうし此すあるて之孫年間にはお
かしと事あつらしきを古書より反古作ちゐ内なる
おもふと　男女うゝ変りて布掛なれに岩倉智あつかしくなりぶ岩倉女ふと
あるて歌に家内をうたひいてし人にあら味なる也
うき世三千を　女のまゝが宅は俗におれいとふ者は世過ていまた男女
ねにこれしくて布うちあかゝ歌にこひしきをあらけ不てわ
うはるしさまに成之

捨て　みめあしき女男にすてられたるを猫島の幽霊なしはなれ来たるに
たとふ

火おかぬ　夫婦生涯はこたつに火おかざるをあわれとして今はわかれて
ひとり女のいかで豊にもみんとおもふまゝ猫のひとり居るにたとふ

門守に　家家にうまれたる放逸にて家道かたふきおちぶれはて門守に
手代なりて寒気しのぐこゝろ　両親存命の時のなつかしくおもひて
夢にもみまほしくおもふさまの両句を見なす也

血刀かゝす　人ふど殺したるもの門守の宿に一泊こゝにてあかさんとて
たゞちに妖怪かりてわたるさまゝ月のくらきを幸に血刀みせし
とかくすなり

夢ものがたり　人を殺害してよりあとしのぶ比わふかく病おり月くらきを幸に
おもふ比しも明七つの刻の声きくとゝ　主伝に地獄なるて江戸の本郷
にては鐘くるはあるまじけ
ねば他国か
ゆえ

冬まつ　物更晩ちかく日まあたゝに納言ちかく声きこえ冬まつとは冬の
文度ゝ筋の人に納言を切音しけしまえ鉢たゝき　むかしは納言を
あかつきなたくるや

花にふき　はなをはかふものとさらて見れば　花は梅の木の徴花と心にとめず
梅花剪し木まん孫ふきて菊の別木枝に雪をかりける　一説は冬
きの花とおもふて剪しかは納言ちく冬けしきとふつよとゝ　花にふくは花を
もしむるゝ連等閑花侍鉢締紋ヶ
傍のつはす　梁歳星に素を奏し従流あり一に若却すれば不知其味とゝ

家々よの奇事をさとり悟道したるさまに見て其は素を丸み
したるみて真ノすりこアラズ」ここの内は墓岩に布つきて有大たる山岳
をうみたる二勢名トスル可シ

白蓮

天智紀六年白蓮を獻したるをあり肥後熊本城中に白蓮あり
城外には出すとて今ゴ家情き抗にねと浸ひ居とき物いはくおと
るかむとおもひて各玄に山岳をうみて答としたる之

宣旨かしこく おりて 西去のみかど 神女にあひて玉釵をもらひたる白蓮となし
をあり みかどの釵ほしくおぼして宣旨ありて木と鑄とこの白蓮に
見立たる之 調異記にあり 巻二

八十年と 八十年を三つにこの八十年のものを奉ち 家の母 在年と之

以ゑの白後世を仕めるとく上代の頃家は年寿もなく見ふすゑ 西内家
陶行年一百八十三年在宣旨 四十七年と十河枝に 中巻可在宣遠年

なかだち 家々兵年人間年ゴおほかりて上寿をゑ迄きを仕たるあか妹
し女人ゑ書むかくさする之 ものをなけしむる之

西南に 天上界に見立故月中桂を作る之 西南に七夕の月の方位之

蘭のあふに 家々のけしきの比蘭の沈と久と メ木の音さひしき之 楚辞—

蘭膏明燭 王注以蘭香絲膏也

賤の家に 家々は婦人化粧に用る蘭澤 陳藏器の子之 ネ 寺寺の女なるに

此賤の家にかこさ女とと云所之 列女伝 宿庭にみや

釣瓶に 田舎ゑそまろしく柳もふくつ之そ おあふ日の夕ネ 家々 防女と

又あるし時刻をふけるのかさたあるへ

はやり来て　ちかり正月をもかしまり詩ふなにいひ出て時をあれ此月の

或とあるをあり近年は文化十年を有しと亀岡宮山の後見多とふ鈴

にはくあるをあるを此ちやり西月をあるを多日の人を見てけるの

正月之日のはひの文をすまみつ之度為をはふましなをとを

つゝみ香　正月を住し弁慶の宮に和歌を奉し度為をはふ之奥州

平泉石部地に弁慶の宮有を

寅の日の　ときつ刀うちんを弁慶の宮にまうをしけふこを寅の日之を

とく起せて刀うちんをまうる之　大鏡に寅日ノ丁アリ

雲からけしき　南京小南部こ春をまつ之こを赤鏡多し　奈良戸をいれて刀工

寺院

もおほくあるをを寺院多き所故　僧の部のつあに香のけをりかほる

おそしはやく刀工を起宮て刀工をふ性実集　微風一帝輪宝幾千

香霜數蓮法身周爰宗妙集　南京の茶師

いかきして　いかきは神祇之事記の所をふに香をかオ大和大納言の像あり

南京の根株を写之

泥のこを　今はたが像をを人しらあさまなを現存のをあ〳〵は泥を姫をまを

芽の根のことをかふ附ちり

京まつ　晩あて例をり落下をかこまり落て屋出仲をまを多心法に

をまを板芽の根にひとしと感ずる之　手苦卑俗の也かし　仕起をかし

ゝ以ちり

狩衣の　月　辛巳終日　山陣のあたに西ふすまの

北の〜　北方のえあり終ふさまの　辛酉前後にあさまあり。

われ山遊　北の方むら雨の音にわれ不浄ぬきまの　愁歎に心われられねば

筆和　やりて女房とふさまんれの

○

霜月　月文山詩　冬晩郊望　南村日載陽鶴鶴入高望

冬の日　鶴のたゝまの月冬の日に冬朝のあけ木にみゆ〜し

提携山家　新古今　冬の来て山もあらはに木の葉ふりつゝ〜あはにさびしき

ひきごゝしほの　牛は風にもかゝ在まま、今風にむかふ松にひきつゝこさうたり

ひきつゝて怪こたるの山中怪しき松に牛の皆えたこふ也

音をふき　狩兵の物見、怪見たるのあれは彼と此と今のあちあふをふしと

山中の陣は松一月の光をたゝみ〜怪とはこふさまの

的とる　陣中西望の時のさまと　共に車と冠家の蘭印のとき　月のうす〜

（さすゝ）

秋のこゝろ　やんとあき山方　狩の時のあの物そは逆奇有しあの時の共

蘭印の

潮はて　壹上かた　東下向のときの山の山家　寺院まに冥り祭ふ

雨ふりてみなにやり〜たゝちの

家にて　山寺のさびしきけしき色

茶に茶道を　椿の花あるより外に音なき山寺に茶と煮てすけぶる空の
　　糸ゆふを楽むと之糸とふより楽と写之けり　所詮は茶の煙りて糸ゆ
　　みえぬ之

就進に　国の字なるが侍あに烏帽子狩衣着せて　烏追狩の景似すること追烏狩
　　とは廣野に赤食る出たる雉を西より東（東より西と追うて遂に殺りたる
　　手負にすること多ときく　逃げたるやすみ訪ふて茶ふど煮て　煙の立さまた
　　家内をみること

庭に木賀　庭中に木賀子けしきうつしつくりたる者後こ木ど女色におぼれぬるより
　　恋のうすきあとつふ之

なつかき　暖氣おそき、木賀沈は橋と橋とおもしけんなる　友人書置云く
　　あつかき山と庭にして橋に橋ひとにみることあるふる山橋は
　　苔がしなれどうにわ

萱屋まばらに　夏山のたそつく家の垣ねにきけの了のはひろはれ立日四に
　　さ、ま蕨しぼみたるさまこと
女ふあまの　萱屋まばらあたたんつくあたりに女ふ拾ふ海のお家て近ふこ
　　とをきるみ　家ほとと運泥あてたる蓮の実とある所
　　に女ふ拾ふのあをぶるさまこ
しつかさに　蓮の実のとれとり又たるもある寺院の池の面に夕月の影のうつる
　　面白くあらひて　ふくも来とみよ夕暮すみたるかと白鷺の飯食あちをのそくさまこ
霞おくきつれ　秋分をきみつ夕暮に狐の社のすくしさうわびて　居たて、
　　ふく寺院のさひしさこ
釣柿に　渋柿とのけばにせんとそつくしおたに霞をきたるんを　住庵を

世に霊ある狐は、寒さをいとふ術をなしむとしこ
を屠りて、かゝる山家の人あるかゝを、病なを繁しと又書きつゝ
正政の母の妻に（乃法師の文四とを見せこ帥は多くふかく母のなくなりたる三
月ばかりさて遠近世時人なこ見えたりとぞ
伏見寺門の土偶は伏見の里に多く門前の入形のかね堂者をつくること錦つく
ひきたと後ちらさま）永は此比の事かねに陸奥うけをふた者のことあやまり
所しへ入れの門前のひきに行のうたにやうにそしりさりし侯あるこ
いろかき　花のちりひしさ水に飽れの色をくしてかゝるとかねて者しおつ
ふさまこ）
青のしをの四季の庭にの枝としかるおたしをとを多くを人をやとひて

秋かりと　前方と風流の人と見立てかゝる言葉を編集するこ（秋かりと云言葉
江と近く　遠方が物豊国記に志賀津疫則投筆面象とふに左つきて
かゝる風流をしながら秋かりとぶ言葉をあむとこ
あの月出よ　後者の為に流涙しあはしき陰者となりてあるそれは邪正を明る
にてこそ月のてりもしとこ
たひ夜　郭勅にて石仰の四会わたしする時のさまに附ちり
のこゝし　雲入海に宇宙より筆の妻にのせトより木瓜をさく山あれの
さびしき屋に　夢かりして　夢とはこせ考るさまこ　如て国の戎士
つかし者たり永かれ足やりまふ行すりり来るを手拭ひ
給わさまこ）

骨を拾て　その節永平見給ひたる人の骸骨を見つけ給て世はかな
きをあはれつけれもはやく寂寞にまぎれやうをおぼえ
しあしてその月も出家しとは白一言の附こ

先食　その昔を思ひ出めとて別に茶つゝむものなく故かなひれるこ
皮の上に　あかつきの頃かこうの見はたれど拾ひかんたうあきれにそこた
まをせたる先食の最もらひて食へと附こ

御寺に　先第の地の寺に典薬頭より調達をしたつ古墓を尋ね折しも
茅白さいの鏡様たつを見じたいと夢あり（きこ）

年にて　去第の時第は茅白をしぶる。こゝはいかもてはたこくれたい角
の夜のもらくちの郊外四季をみたるけしきこ

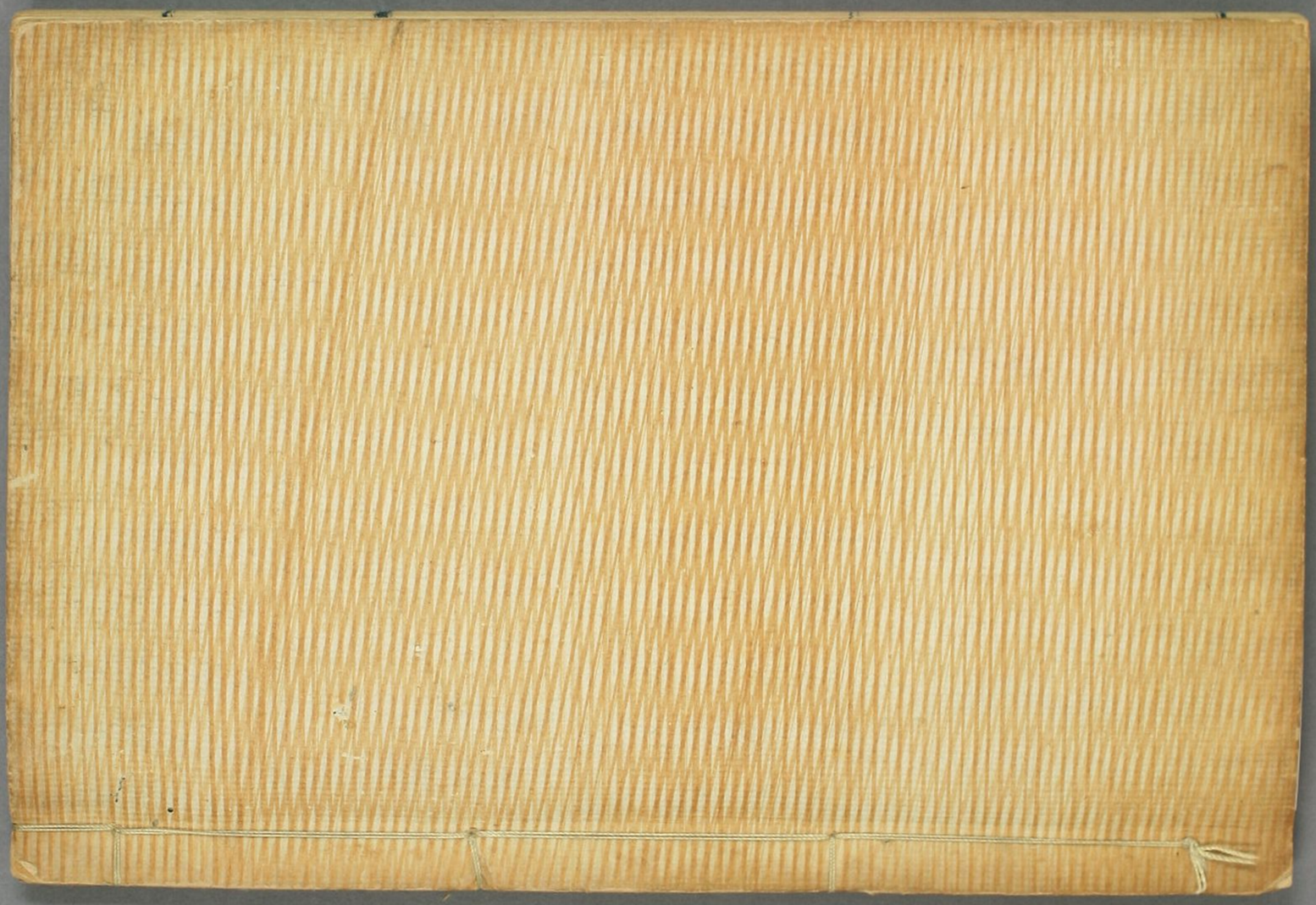
猫の汁（ときかすこ）瓶洲府志　出山りいつるしろき花をくたきて世中（寿こ
ホとしのせるこしらすこ）

水干と　内しるを大納言とまるき家ゆ柳華蓋をみえたり　秀句のたゝり
例の金帛あるかんとする道あるかの登かきた所用あてよだ給ふこ

句の魚　いしかり主任に屬若来茅花をあ水は此一巻しを結ん
その若頃帝祈をまりくのあるし云ると水干若殿ふさまにて
ましたつさすこ

山茶花　若殿の服白に山茶花あり　その山茶花さしたつ男みホ拾ふきて
その木はあたかにつちやきちりとゝあこ

大正十四年十月十七日除幕

いかに見よとてくるもの牛はしら面に
板のうたるまふでなるこ（ツレナキハ牛（のこ）注有しあの多かまし
樽大に　牛の遠方に逗留の者（途中を野宿して樽のまに酒あるの
その底）高野樽程ふで多大と返すことあるなり　今は多地国に
風燭ふでおくるのしかること多之ぞ
とくさかり　樽大と木賊苅の事ハ百姓てこ多笠なるは山家ふる
木賊苅の後に木賊の麻衣神無月トアリ但し木は上着なるてうは
下着とぶ
樽笠に　樽笠年寄倉の宮浦殿ふて笠ぬてて笠ぬやつし和歌笠めきせ
さまをうつして作る　木賊苅山中を通し之するさまを）
銀に吹　宝ものつして義しまの事ほに　物ほ度ふあけやうに月に物
のうて海ようつ有明月こそのに富士山も小ぶくうえ絵どめし
あるものふまた　吹落ているの有を白銀ものあるかんを
いちりに樽を　海ものかたに月落て寄方に樽を寄向り浦と見する岐阜山
つあけ多てけしきこ　多のあから吹を来しもたしろかねあちへて
吹を宮こ　岐阜山は美濃殿の郎こ　岐阜山近所の宮に樽あし
貞享の比にはあしか、あるすは寄の向りをはあれど　木の向りあるす
なるて
貞享　甲子歳

高知堂製